

# こころの灯火

学長 藤原了然

いたづらに枕を照すともし火も

思へば人の油なりけり

福田行誠（一八〇六一八八八）は、佛教徒としては、明治維新を中心として、日本佛教界の第一人者であり、また歌人としても日本の歌道史にその名を刻む大家であつたようである。今あげた歌は、彼と同時代の代表的歌人であつた高崎正風が、「是程これほどの歌を詠まむもの、よも凡人にはあらじ」と感歎したと伝えられる一首である。

しかし、『行誠上人全集』の附録には、行誠上人の略伝を記する中で、その歌才をたたえるところにも、「蓋し上人は初めよりして歌人たらむとしたるものに非ず。又、佳作に意ありて作りたるものに非ず。徳あるものは言ありて、其の不用意の作実しに天籟の好響を發したるに外ならず。歌人としての上人はむしろ上人の片影のみ。而も猶お且此くの如しとせば、上人たるもの、明治の緇流しやうりゅう（僧侶）中に在りて、実に得易からざるの高僧ならずとせむや」といつている。

もとより行誠の非凡の歌才を否定しようとするものではないが、そのいわんとするところは、行誠の歌がわれわれの心をうつものがあるのは、彼の歌が、行誠の磨かれた全人格から湧出したものであ

るということであろう。このことは、行誠が、混乱した社会事情の中、とくに佛教界の動揺無際の中で、超宗派、没我に徹し、あらゆる障害をこえて明鏡止水の心境で、佛教の大道を進んだことによって覚醒されうところである。

学問の世界においても、今日ではいろいろな細分化が試みられ、時にはその何れを取るべきかに困惑を覚えることも稀れではない。

佛教の根本教説の雄とされる『法句経』の中には、

「有<sup>レ</sup>信則戒成」

〈信あれば、則ち戒成る〉

といわれている。

詳説は容易ではないが、要約していえば、人間は内なるもの（本心）が確立していれば、その人の生活ルール（戒）、環境はおのづから調ってくるものであるということである。それを形にとらわれて右顧左眄<sup>ミ</sup>するのは佛道の本筋ではないということであろうか。

学問の本質はやはり孟子の言葉をかりるまでもなく、信（念）の確立といつていいであろうか。佛敎大学が建学精神として強調している佛敎精神なるものも、他語するならば、この信の人間的確立といつていいであろう。しかし、言うは易く、その実現は必らずしもたやすいことではない。この佛敎大学学報に盛られている多くの先覚指導者の言葉を指針として、明日への歩みの灯火としたいものである。